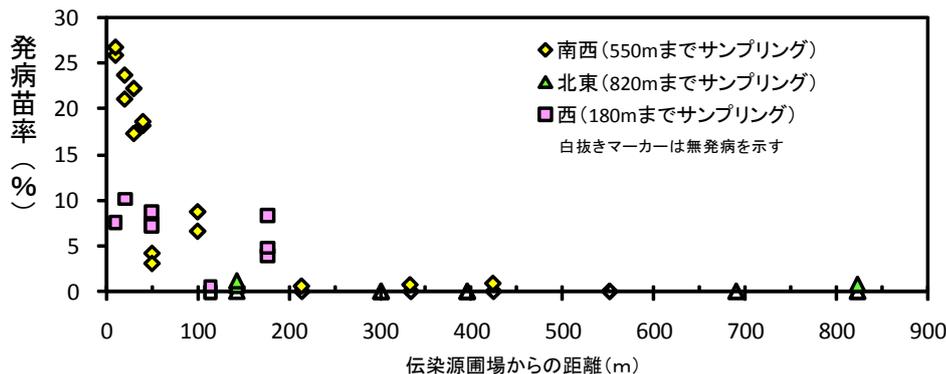


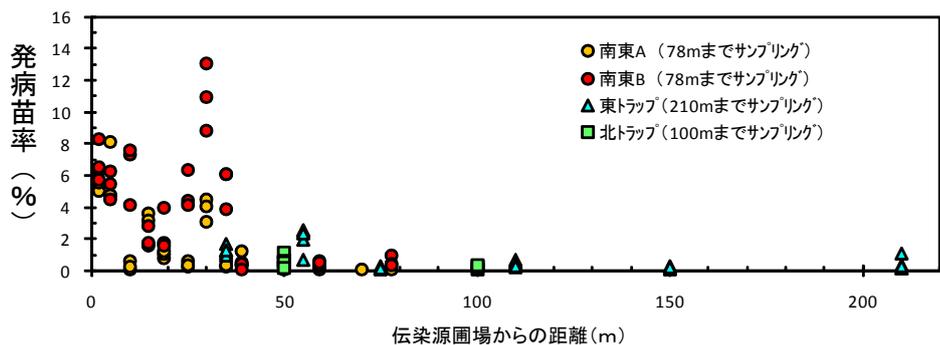
事項	イネばか苗病発生圃場からの孢子飛散が周辺圃場の種子保菌に及ぼす影響		
ねらい	<p>近年、減農薬栽培の増加に伴い、イネばか苗病が県内各地で散見されている。本病は種子伝染性病害であり、発病・枯死した株（写真）からの孢子飛散による種子感染が主要伝染経路である。そのため、採種圃場への孢子飛散による汚染が懸念されている。</p> <p>そこで、イネばか苗病発生圃場の周辺圃場からサンプリングした種子の保菌状況を調査した結果、周辺圃場の種子の保菌に与える影響について明らかにしたので、参考に供する。</p>		
指導参考内容	<p>1 距離との関係 種子の保菌状況は、発生圃場に近いほど多く、距離が遠くなるにしたがい、指数関数的に減少する。</p> <p>2 伝染源の規模による違い 種子の保菌状況にみられる連続的な減少は、伝染源の発生規模（発生面積と枯死株率）により異なり、発生規模の大きい場合は伝染源から200m程度離れても見られることある。</p>	 <p>写真 白色粉状の孢子が大量に形成された枯死株</p>	
期待される効果	採種圃場周辺でイネばか苗病が発生した場合、採種圃場への影響の目安として活用できる。		
利用上の注意事項	<p>1 種子の保菌状況は、育苗試験による発病で評価しているため、浸種中の二次感染や未発病の保菌数などにより、「真の保菌状況」とは異なる可能性がある。</p> <p>2 イネばか苗病は空気伝搬するので、微気象風向などにより、伝染源から離れた地点でも種子が感染する可能性がある。</p>		
問い合わせ先 (電話番号)	農林総合研究所 病虫部 (0172-52-4314)	対象地域	県下全域
発表文献等	<p>平成23年度東北農業試験研究成果情報（宮城古川農試、青森農林総研）</p> <p>平成20年北日本病害虫研究会報第59号</p> <p>平成21年北日本病害虫研究会報第60号</p>		

【根拠となった主要な試験結果】



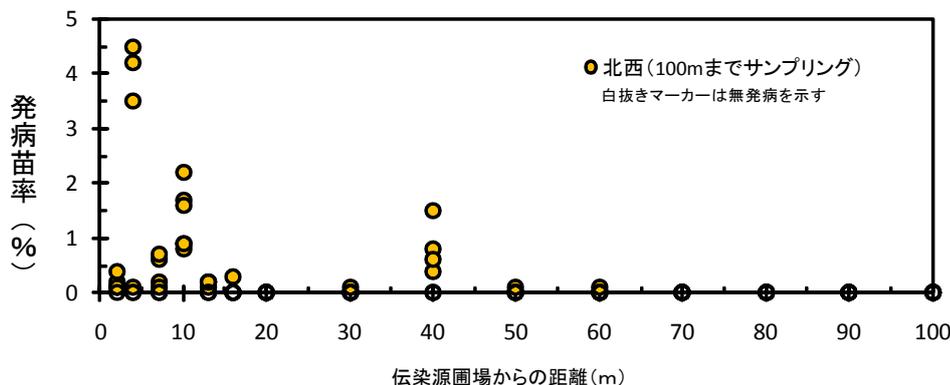
事例1：甚発生圃場の周辺圃場から採種

伝染源の枯死株率：10.7%
(徒長株含む)
伝染源の発生面積：190a
採種年：平成18年
採種地：一般圃場



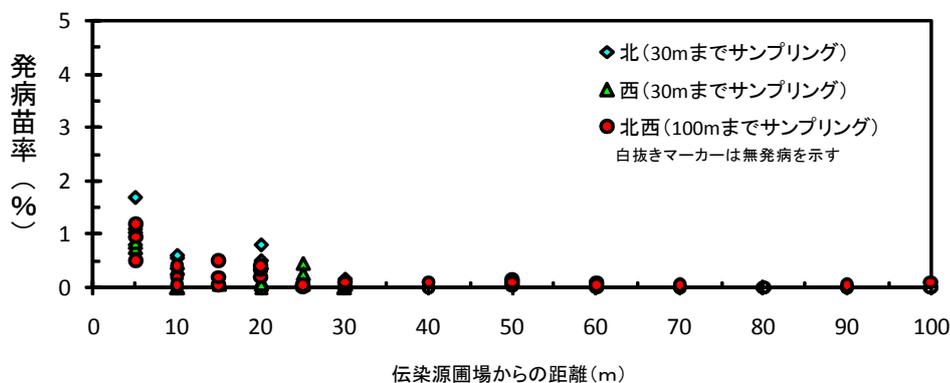
事例2：多発生圃場の周辺圃場から採種

伝染源の枯死株率：16.4%
伝染源の発生面積：7.2a
採種年：平成23年
採種地：境松圃場



事例3：中発生圃場の周辺圃場から採種

伝染源の枯死株率：16.2%
伝染源の発生面積：5.9a
採種年：平成21年
採種地：境松圃場



事例4：少発生圃場の周辺圃場から採種

伝染源の枯死株率6.5%
伝染源の発生面積：1.6a
採種年：平成19年
採種地：境松圃場
1m地点は発病苗率17.1%のため省略。

図 イネばか苗病発生圃場の周辺圃場から採種した種子の発病状況

(注) 1 事例1から4は発生規模(発生面積と枯死株率)の大きさ順とした。

2 品種は「つがるロマン」ほか、供試籾は採種後、水選、無消毒で翌年に播種